

## 被災地における復興に向けた熟議・住民対話の取組事例について

平成23年7月19日  
文部科学省

下記のように、復興に向けた熟議・住民対話が各地で始まっている。

**【行政と住民が共催】**

- 宮城県女川町「女川向学館懇話会（女川熟議）」 ※詳細別紙
- 行政、地域、NPO が協働で開校した放課後の補習教室の運営や、今後育んでいくべき被災地の子どもたちの力について、県教委や文部科学省も参加して熟議が行われた。
- ・ テーマ：女川の子どもを、女川の大人が育てるということ
  - ・ 参加者：教職員、保護者、地域、町・県教育委員会、文部科学省等約40名
  - ・ 主催：女川向学館（女川町教育委員会、女川学力向上委員会、NPO カタリバ）

**【行政が主催】**

- 宮城県気仙沼市「気仙沼市震災復興市民委員会」
- 市民による9回の会議を経て、学識経験者や市総合計画審議会委員からなる「気仙沼市震災復興会議」への提言を提出予定。市民委員会は、計画に関する委員自らの意見及び提言を集約するとともに、意見把握のためのインターネット活用、学校その他の機関及び団体との連携など、必要な取組を行うこととされている。
- ・ テーマ：(仮称)「気仙沼市震災復興計画」について
  - ・ 参加者：在住および出身の市民11名
  - ・ 主催：気仙沼市
- 岩手県大船渡市「復興に向けた地区懇談会」
- 市民の意見を復興計画に反映させるために開催。学識経験者、議員、公共的団体役員等からなる「大船渡市災害復興計画策定委員会」へも結果は報告されている。
- ・ テーマ：「復興計画骨子(案)について」
  - ・ 参加者：大船渡市民（市内11地区で開催し、合計1355名が参加）
  - ・ 主催：大船渡市

## 【住民やNPO等が主催】

- 宮城県石巻市「石巻オールジャンル寄合」 ※詳細別紙  
有志によって毎週水曜日に開催。今後行政関係者へも参加を呼びかけていく。
  - テーマ：石巻をこれからどんな街にしていきたいか
  - 参加者：水産業者や飲食店等の住民有志約10名
  - 主催：石巻市住民の有志・プロジェクト結
  
- 宮城県石巻市「熟議 in 石巻（教育夏まつり）」（平成23年8月20日実施予定）  
学びのグッドプラクティスの紹介等が行われる「教育夏まつり」を今年は石巻で開催。現地の子どもたちによる熟議に続き、その結果を踏まえた大人による熟議が行われる。
  - 参加者：小・中学校生、教職員、保護者、地域、NPO等
  - テーマ：その時、ぼくたちがしたこと、これから私たちができること
  - 主催等：主催：NPO 日本教育再興連盟／後援：文部科学省・石巻市教育委員会等／特別協力：宮城教育大学、東北大学教育学部
  
- 岩手県大槌町「こどもたちのための復興支援を考える青空座談会」 ※詳細別紙  
今、子どもたちをどう支え、街の未来へつなげるか、専門家も交えた対話が行われた。
  - テーマ：様々な立場から見た子どもたち一人ひとりのニーズについて考え、より良い支援につなぎ、今後のまちづくり計画に生かしていく。
  - 参加者：大槌町保育関係者、教職員、保護者、地域、大学関係者、NPO等約40名
  - 主催等：主催：大槌町PTA 連合会長／後援：公益財団法人日本ユニセフ協会

女川向学館懇話会（女川熟議）

主催	女川向学館（女川町教育委員会、女川学力向上委員会、NPO カタリバ）
テーマ・内容	女川の子どもを、女川の大人が育てるということ 震災後の、女川の子どもの教育のことを、地域の皆さんが語り合う『場』
日時	平成23年7月3日（日） 16:00～18:30
場所	女川第二小学校（宮城県牡鹿郡女川町字大原310）
参加者数	40名（約8名×5グループ） 教職員18名、保護者9名、地域13名、女川町教育委員会（教育長等）、宮城県教育委員会（教育次長等）、鈴木文部科学副大臣、文部科学省（生涯学習政策局政策課長等）
熟議の概要 （主な意見）	<p>女川向学館の開校等、積極的に教育の復興に取り組む女川町で、子どもたちを取り巻く現在の状況や、今後の学びについて下記のような熟議が行われた。</p> <p><b>【現在の学校や避難所の環境について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ハエが非常に多くて衛生面で課題があり網戸の整備が急務。</li> <li>○ 熱中することが無く、友人関係のトラブルが増えている。仲良しグループが日替わりで変わっている。</li> <li>○ 避難所での親同士の間関係が、学校での子どもたちの関係に影響している。</li> <li>○ 見舞い行事（慰問）が多く教員と子どもの触れ合いの時間が少ない。</li> <li>○ 震災後に移動してきた先生とは、子どもたちも保護者も一線を引いている。震災体験を共有している教職員（講師含む）で支えていくことが必要。</li> <li>○ 養護・事務兼務の教員は、学校が2つの学校で分散再開した影響で十分な対応が出来ておらず、兼務の解除が必要。</li> </ul> <p><b>【今後の子どもたちの学びについて】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 修学旅行等の行事が実施できるか心配である。</li> <li>○ 生き方を問い直す機会として、夢を実現するためのキャリア教育が必要。</li> <li>○ 震災だからこそその教育が必要（豊かに生きることや、感謝の気持ち）</li> </ul> <p><b>【今後の子どもたちを支える体制について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 関係者が想いを共有する関係になることが重要。保護者で熟議を重ねて女川の子どもを支える体制を作っていくことが必要。</li> <li>○ 評判の良い講師の先生が教職免許を取れないケースが多いように感じる。採用試験の在り方に課題があるのではないか。</li> <li>○ 子どもを目線を復興計画の中に入れていって欲しい。</li> <li>○ この状況を乗り越えるには心意気が大切。皆で共有していきたい。</li> <li>○ 学校と向学館の立ち位置、連携について相談を重ねていきたい。</li> <li>○ 何でも「してもらおう」ことに慣れないよう、向学館の有料化も考えてはどうか。</li> </ul>

**【総括】**

- 遠藤女川町教育長: 向学館に携わる人も含めたすべての女川の人の想いをひとつにして、志を建て高める子どもを女川で育てよう。
- 鈴木文部科学副大臣: 要望要求を行政だけが受けるのではなく、すべて方が「女川の当事者」として取り組む姿を目の当たりにして感動した。女川から日本の教育を変えていくことに真面目に一緒に取り組みたい。

熟議の翌日から向学館は開校し、小中学校、向学館、PTA 行事の年間計画の情報共有が熟議参加者の間で生まれるなど、地域での自立した子どもを支えるネットワーク作りが進んでいる。また、8月には2回目の熟議の実施を予定している。

女川向学館とは：女川町教育委員会・女川学力向上委員会・NPO カタリバが、女川第一小学校内で協働して運営するコラボスクール（協働型の学校）。被災した子どもたちの学習機会を確保するために7月4日に開校。放課後に町内の小中高生約180名が学んでいる。講師は被災した地域の学習塾関係者を雇用している。



熟議の様子



## 石巻オールジャンル寄合

主催	石巻オールジャンル寄合（石巻市住民の有志・プロジェクト結（別紙参照））
テーマ・内容	石巻をこれからどんな街にしていきたいか
日時	平成 23 年 7 月 13 日（水）19:00～21:30（以降、毎週水曜実施予定）
場所	きのや石巻水産
参加者数	10名（水産業者4名、飲食業2名、その他4名）
熟議の概要 （主な意見）	<p>1つの業界に関する話し合いではなく、石巻の多くの業界の方々と繋がって、みんなにとって良い石巻を考える。また、毎週行うことで、人をだんだんと増やしていき多くの意見と視点を取り入れていく。</p> <p><b>【目指したい石巻像】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 水産業日本一</li> <li><input type="checkbox"/> 優秀な人材が流出しない町</li> <li><input type="checkbox"/> 活気ある町</li> <li><input type="checkbox"/> 緑と水の豊かな町</li> <li><input type="checkbox"/> 余裕のある町</li> <li><input type="checkbox"/> エコを売りにしたモデルとなるような町</li> <li><input type="checkbox"/> 北上川の景色を活かした町</li> <li><input type="checkbox"/> もっと人が来るような町</li> <li><input type="checkbox"/> 若い人が発言しやすい町</li> <li><input type="checkbox"/> 消費ではなく再生できる町づくり</li> <li><input type="checkbox"/> きれいな町</li> <li><input type="checkbox"/> 協力しあえる町</li> <li><input type="checkbox"/> 楽しくおもしろく明るい町</li> <li><input type="checkbox"/> 有名な町</li> <li><input type="checkbox"/> 津波が来ても大丈夫な町</li> <li><input type="checkbox"/> ディズニーランドみたいな町</li> <li><input type="checkbox"/> 新しいことに挑戦しまくる町</li> </ul> <p><b>【必要だと思われること】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> ブランディング</li> <li><input type="checkbox"/> 他地域の人たちを巻き込む（ポジティブなことを通して繋がる）</li> <li><input type="checkbox"/> オールジャンルの繋がりをつくる</li> <li><input type="checkbox"/> 横の繋がりと多世代の繋がり両方を</li> <li><input type="checkbox"/> 安心して働けること</li> <li><input type="checkbox"/> ねたまない、足をひっぱらない</li> <li><input type="checkbox"/> 石巻サブカルチャー</li> <li><input type="checkbox"/> 地元で認知され、地元で愛されること</li> <li><input type="checkbox"/> もとに戻るのではなく『レベルアップ』</li> <li><input type="checkbox"/> 変革</li> <li><input type="checkbox"/> 発信</li> <li><input type="checkbox"/> 逆転の発想で、津波を利用する！</li> <li><input type="checkbox"/> 心の整理（ネガティブ→ポジティブ）</li> <li><input type="checkbox"/> コミュニティの形成</li> </ul> <p><b>【したいこと】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 被災の町を世界に訴えたい</li> <li><input type="checkbox"/> 未来都市の建設</li> </ul>

- 町歩きの楽しさを伝えたい
- 石巻にある研究材料をもっと使ってもらおう！
- 神戸の時の情報がいかされていない。今度こそ本当にいかされるような教育を。
- 協力できて、話あえて、アイデアを出せる人を育てる
- 被害を受けた町並を残して観光資源に
- 防災を商売に
- 地元と他地域で協働して新しい産業を生み出す

**【具体的なアイデア】**

- 津波がここまできたぞシール
- カジノをつくる
- 防災の情報が集まるシンポジウム in 石巻
- バイオマス事業
- スポーツ施設の建設
- お風呂の建設（公共浴場、エコ、モニュメント的に）
- ひかえめな町日本一
- 防災大学をつくる
- 芸術スクールをつくる
- オールジャンルの会議を行う
- 宿泊施設が不足しているので客船を呼ぶ
- 被災日本一（〇〇宣言）
- 11日はみんな休み！！

**【その他】**

- 被災地の人たちからのポジティブな気持ちが、他地域の人たちの心を癒す
- 子ども達に「いい日本」で渡したい

**【総括】**

今回は、行政の方や他業種の方々に参加を促す。（今回は、市議会議員にも参加いただいた。）

熟議の様子



大槌町:こどものための復興支援を考える青空座談会

主催	<p>主催者: 大槌町 PTA 連合会長 東梅 守                  アドバイザー／ファシリテーター:                  東洋大学 社会福祉学科 教授 森田明美                  岩手県立大学 社会福祉学部福祉臨床学科 准教授 山本克彦                  後援:公益財団法人 日本ユニセフ協会</p>
テーマ・内容	<p>様々な立場から見た子どもたち一人ひとりのニーズについて考え、より良い支援につなぎ、今後のまちづくり計画に生かしていく。</p>
日時	<p>平成23年6月30日(木) 15:00～17:00</p>
場所	<p>大槌町吉里吉里 吉祥寺 本堂(岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里4丁目4-7)</p>
参加者数	<p>大槌町住民 30名                  保育関係者10名、学校関係者3名、保護者／地域15名、看護師1名、小学生1名                  その他:NGO 職員1名、その他大学関係者(関西学院大学 教育学部 准教授 浜田進士を含む)3名、ユニセフスタッフ9名</p>
熟議の概要 (主な意見)	<p>大槌町でも多くの子どもたちが被災し、長い避難所生活等、困難な環境にある。「10年後の大人」である子どもに対する支援を優先的な課題とすることで、大槌町の将来がより安心安全で発展していくのではないかと。こういった前提のもと、子どもの支援者である住民が集まり下記のような座談会が行われた。</p> <p><u>地域高校生が参加した住民会議を率いた教員から今の大槌の高校生の話:</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒が震災後、将来なりたいこと、したいことが具体的になっている</li> <li>○ 看護師や建築士などになって大槌に戻りたい</li> <li>○ 自分たちが頑張らないといけないという思いが強い</li> <li>○ 高校生同士で意見交換が出来る関係が出来ている</li> </ul> <p><u>その高校教員の感想:</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒のたくましさを感じ、子どもたちが10年後の大槌を担うんだと感じる</li> <li>○ 高校生の成長に向き合う事の責任、方向性を大人が示して行かなければ</li> </ul> <p><u>保護者や地域の住民から見た小中学生の様子:</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校が避難所になったり、他の学校の体育館を間借りしたり、学習環境の変化に敏感</li> <li>○ 校庭や空き地は全て仮設住宅などが建ち、遊び場がない</li> <li>○ 避難所では遠慮、仮設住宅の方ではのびのび出来るといっている</li> <li>○ クラブ活動がない、学童がない(お爺ちゃんやお婆ちゃんが見ている)、夏休みの居場所の確保が不安</li> <li>○ プールがない、「黒い水が来た」と覚えている、暑くなったら海で泳ぎたいが「お母さんが今年は海に入れなよといわれた」という</li> </ul>

- 通学時の子どもたちは元気そう
- スクールバスは安全、最初は楽しかったが、酔ったり、疲れたり
- 以前のように友達と歩いて通学、寄り道などが出来ない
- 子どもだけのちょっとした時間と空間がない、放課後の子ども同士の遊び場がない
  
- 普通の生活を取り戻してやりたい
- 学校や地域の行事など(運動会、伝統行事、遠足、祭り)ができなかったり、なかったり、地域や親族皆で子どもたちの成長を喜ぶ機会がない
- 大人ができることをもっと企画しないと子どもたちが元氣になれない、子どもたちが元氣になれないと大人も元氣になれない
  
- 津波の事は話題にしない、泣かない、強がっているのか、我慢しているのか
- とせば、聞いて聞いてと話が止まらない事も
- 祖母を亡くした小4の娘さん、「おばあちゃんは東京に行っているんだよ」って、家族を亡くした事を子どもに伝えられないでいる親、子どもがどう考えているか、受け止められるのかが怖い
- 女の子同士の間関係は難しく、同級生が遠くへ引越し、友達の所へ行きたいと言いつ出す
  
- 6年生が1年生の面倒をきちんと見ようという雰囲気になっている、責任感が生まれている(震災後、コンビニ弁当が給食、1年生に残さないようにと言うためには6年生も苦手な食べ物は残さないように頑張っている、子ども同士の力、成長が見られる)
- 震災後、町内の中学校同士が部活動の試合で応援し合う仲に
- 子どもたちは学校を楽しもうとしているよう、反対に保護者の方が情緒不安定(親以外の大人の役割も重要)

保育・保健関係者が見た幼児の様子:

- 子どもたちは思った以上元氣、成長している
- 夜泣き、ぐずり、おねしょがでる、パンツをはけるようになった子がおむつに戻ったケースもある
- お散歩などで外に出る事に抵抗、「川があるから外には行かない」
- 「海はこわい」、暑くなって水遊びもしてやりたいが、控えている
- 津波を見た影響や環境が変わったことによる影響
- 体を動かす機会、場所限られている
- 子ども同士、氣を使っているかも?
- 保育の場所が変わっても子どもの適応力やパワーを感じる、変化が見られる事もあるが、パワーでカバー
- 津波について全く触れない子もいる、それぞれの年齢で抱える悩みも様々で、保育



士もどうしたらいいのか判断に迷う事も

- 保護者(お母さん)が保育が始まり「先生(保育士)と話せる場所が出来てうれしい」

十代の子どもを持つ親の観察:

- 高校生の娘、心の傷、震災の事は話さない、友達との付き合い方が変わった、関係の取り方が上手く出来ない
- 不登校だった娘が震災後登校し始める、子どもの自信につながる
- 避難生活が続く中、子育ての悩みもあるが、家族内の繋がりも強くなったか
- 高3の子ども「町内で育ててもらっている」、地域に見守られている安心感
- 地元で働きたい、地元に戻りたい
- 家族の中、大人が子どもたちのよりどころ、理解してもらえる、同感／共感する事の重要性
- 高校生はこどもと大人の間

まとめ:

- 様々な人(子どもも含めて)が円になって話す事で分かることがあり、その必要性や大切さをこの座談会という形で学んだ
- 専門家の先生方に率いてもらったのも効果
- 子どもと一緒に元気になる、地域は子どもの力を借りて元気になる、子どもが変わる(元気になる)と親が変わり、大人が変わる
- 様々な意見を具体化できるように地域がまとまり、子どもの声を聞いて施策して行く
- 子どもと共に可能性を広げ、子どもと共に暮らしを作り出す事の中に希望を見いだす、「子どもの力、子どものために頑張る」というキーワード重要

今後の予定:

- こういった座談会を参加者の参加しやすい時間帯(夕/夜)に開催
- テーマ別に数回行う(保育・幼児、小中学生、高校生)
- 子どもたち自身が参加・参画できるような会や活動を取り入れる

熟議の様子



(写真提供: 日本ユニセフ協会)





被災地の子どもたちの学びと遊びを支える

# プロジェクト結い



「プロジェクト結」は震災に見舞われた子どもの学びと遊びの機会に焦点を当て  
日本のみんな(個人・NPO・企業・行政など)で支える活動です。

中・長期的視野に立った息の長い取り組みを通じて被災地のコミュニティの復興と  
子どもの学びと遊びの機会を支援することを目指します。

賛同団体(このほか、[文部科学省「熟議」に基づく教育政策形成の在り方に関する懇談会の全委員を含む](#)、多くの方にご賛同いただいております。詳細はWebサイトを御覧ください。)

青森県横浜町教育委員会、秋田県由利本荘市教育委員会、(社)アスリート・ソサエティ、(株)アソビジ、アマタホールディングス(株)、(株)イーストワン、特定非営利活動法人医療ネットワーク支援センター、いわき市生涯学習ネットワーク会議、特定非営利活動法人エデュケーショナルフューチャーセンター、特定非営利活動法人NPOカタリバ、演劇集団キャラメルボックス、学生団体STUNITY、(株)キャリアリンク、(株)教育同人社、京都府京都市教育委員会、近畿日本ツーリスト(株)、慶應義塾大学長谷部葉子研究室、(株)GTF、特定非営利活動法人次代の創造工房、している(株)、特定非営利活動法人じぶん未来クラブ、特定非営利活動法人シュアティ・マネジメント協会、財団法人出版文化産業振興財団(JPIC)、有限会社シンピプロジェクト、(株)スポーツビズ、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、SET(Student Emergency Task Force)、全国コミュニティ・スクール連絡協議会、特定非営利活動法人全国てらこやネットワーク、特定非営利活動法人相互教育ネットワーク・誰でもヒーロー、ソニー(株)、<大震災>出版対策本部、東京13ウォリアーズ、東京都三鷹市教育委員会、日本アイ・ビー・エム(株)、(株)日本カウンセラー学院、日本電気(株)、公益社団法人日本フィランソロピー協会、日本マイクロソフト(株)、(株)マイルスコミュニケーションズ、特定非営利活動法人日本臨床心理カウンセリング協会、(株)博報堂、バックアップセンタージャパン、特定非営利活動法人ボックス・アース、(株)バンダイナムコホールディングス、ヒーローズエデュテイメント(株)、兵庫県加西市、(株)ファミリーマート、富士ゼロックス(株)、特定非営利活動法人プラストビート、(株)ブロックス、(株)ベネッセコーポレーション、特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟、POKÉMON with YOU、(株)森熊、森永乳業(株)、財団法人ユネスコ・アジア文化センター、一般財団法人ラン・フォー・ピース協会、(株)リクルート、(株)ローハイド、和歌山県和歌山市教育委員会、和楽プロジェクト

オブザーバ 文部科学省

アドバイザー 鈴木 寛(文部科学副大臣、参議院議員)

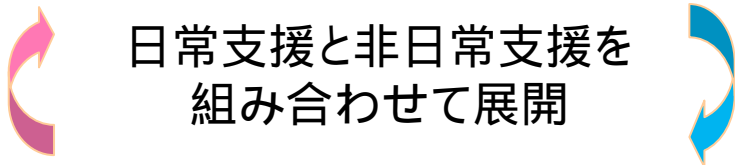
プロジェクト名の由来について

プロジェクト名の「結(ゆい)」とは、日本古来に伝わる、田植え・屋根葺き等一時に多大な労力を要する農や生活の営みを共同作業で行うことを指します。官民や地域の垣根を越え、被災地の創造的復興に知恵と力を出し合い、子どもたちの笑顔を取り戻したいという思いを込めて、「結」と名付けました。

## 日常支援

### 放課後の「みんなの場づくり」を中心に展開

子どもたちの学び・遊びの場の回復のため、学び・遊びのノウハウや道具、教材などを毎週派遣するボランティアを通して提供します。企業派遣や学生を中心とするボランティアは、事前研修を受けたうえで被災地などに赴き、放課後の時間を使って、「みんなの場」で子どもたちの学びや遊びを支援します。



日常支援と非日常支援を  
組み合わせて展開

## 非日常支援

### 地域イベントの企画・開催を中心に展開

被災した子どもたち、地域の方々を元気づける「非日常的なイベント」を、復興フェーズに合わせて、プロデュースします。プロジェクト結の事務局が、現地の要望を汲んだうえで、エンターテインメントなどのパッケージを持つNPO や組織と企画・準備を行い、現地に派遣いたします。



一般社団法人 プロジェクト結コンソーシアム  
(理事長:長尾 彰 副理事長:荻原 直紀)



**【ウェブサイト】** <http://project-yui.org>  
**【Email】** [Info@project-yui.org](mailto:Info@project-yui.org)  
**【Facebook】** <http://www.facebook.com/project.yui>  
**【Twitter】** @projectyui

5月18日毎日新聞夕刊2面記事

東日本大震災の被災者のために一体、自分は何ができるのだろうか……と考えている人は多いはずだ。「災害を報じているだけでいいのだろうか」と日々、思い悩んでいる私もその一人だ。そこでこのほろぼろ定めた、あるプロジェクトに誘われて、賛同者として加わることになった。

「プロジェクト結」という。被災した子どもたちの教育に焦点をあて、永く「学び」と「遊び」を支援していくというのが目的。賛同者や賛同団体には全国のNPOや大学の先生、各地の教育委員会関係者や教育関連、玩

## 熱血! 与良政談

与良正男

具メーカーなど多くの企業が名を連ねた。そして、文部科学省がオファサーバという位置づけでかわって、鈴木寛副文科相もアドバイザーという立場で参加している。

不足している教材や玩具などモノと資金を支援していくだけでなく、既に先月から、研修を終えたボランティアを現地に派遣し、例えば放課後の時間を利用して子どもたちに遊びの場を提

### 民も官も垣根を越えて

供したり、イベントを開催したりという活動を進めている。地元の学校とのネットワークもできつつある。

もうお気づきと思うが、NPOも企業も役所も個人も壁を取り払って一緒

に取り組むのがミソ。行政だけでも、民間だけでも、とてもこの困難は乗り越えられないと考えるからだ。

理事長になった長尾彰さんは1975年生まれで、教育カウンセラーなど



の仕事をしてきた若き社会起業家だが、こんな話をしているので紹介しよう。

「やりたい人」が、「できること」を「やれるだけ」やる。復興支援などど大きく構えず、子どもたちに寄り添いながら、一緒に時間を過ごす。子どもたちは、そういう大人の姿を見て育っていくのでは。こんな時だから皆で力を合わせる。本来すべきことを今こそ行なうべきだと思っ

官でも民でもない。つまり、このコラムでも書いてきた「新しい公共」的な組織作りを、震災直後から思いつき、賛同者の輪を広げてきたのは文科省の若い官僚だったことも触れておこう。

官僚の世界も若い人たちが、大きく変わってきているのだとつくづく思う。さて、こうなると、「オールジャパン」体制ができないのは、いよいよ政界だけですかねえ。

「プロジェクト結」に関心のある方はホームページ (<https://project-yui.org>) を。

(論説副委員長)